

日本は世界一クリシュナムルティの教えを実践しやすい国である

島田大綱

タイトルを見て、こういうタイトルのものを書くからには、当然、本人がクリシュナムルティの教えを完璧に理解しているのだろう。あるいは、社会にどんな貢献をしてきたのだろう。どんな肩書きの人物が、あの難解と言われるクリシュナムルティの教えを体得してきたのだろう、などと想像を膨らませ、好奇の目で見られているかもしれません。

しかし、私は覚者とか、聖者とかとは、かけ離れた存在です。クリシュナムルティの話の直に聞いたことすらありませんし、専門の研究者でも、熱烈な信奉者でもありません。もし、彼と相對したら、きっと、あなたは私のいうことをなにも聞いてない、理解していないなどと駄目出しを出されるでしょう。

これはクリシュナムルティの教えとは、別ですが、社会的ステータスでも、誇れるものはなく、四十代半ばで肩書きもない、いわゆる下流層の日本人です。ただ、こんな私が見ても、現代、生粋の真理を吐くような霊的教育者、宗教家、神秘家が、皆無に等しくなり、真理の解釈までが人間の都合のいい歪曲で大幅にずれてきているように思うのです。真理の灯が欲と商業主義の波に飲み込まれ、その一灯が風前の灯になってしまっているとすら思えるのです。

これは、少なくとも、私が生まれてから最悪の状態であることは、間違いありません。もちろん、誰もが子ども時代を経て成長していくわけですから、その成長の段階、靈性に合わせた心の教育は必要だし、真面目な教育者は、いまも多数いるでしょう。しかし、その先が、視界不良になって、ぼけているように思うのです。あるいは、みにくいアヒルの子が、白鳥となって羽ばたくよう生まれ変わるためのアドバイスのようなものが、解説、評論も含めて、なかなかライブで聞けません。

人間の意識を一本の川にたとえますと、下流に行くほど適応力の強い、様々な種類の魚が住んでいます。しかし、上流に上がると、その透明度の高い水質に住める魚は限られてきます。ヤマメやイワナなどは、見かけ（オーラ）もきれいです。不謹慎な言い方ですが、キリストや釈迦のように源流に住む魚は、それこそ稀にしか見かけません。そして、上流の水質が悪化して、上流の魚が減るような環境になれば、当然、下流の水質にも連鎖の悪影響が出て死ぬ魚が増えたり、奇形の魚が出てきます。クリシュナムルティも意識はつながっていて、目覚めた人が十人でも出れば、人間意識全体に大きな影響をもたらすだろう

と。デヴィッド・ボームとの対談でこう言っています。

ボーム (B) しかし、覚者がいれば、基底は彼をもちいるでしょう。

クリシュナムルティ (K) そのとおりです。基底は人間を必要としていないが、基底に触れた人がいるということです。

B ええ。

K そういう人がいると基底は彼を使う。あるいは、雇うようになり、かくして彼は、基底の運動の一部になるのです。(略) おそらく、この洞察を持った人が十人いれば、多分、それは社会に影響を与えるでしょう。が、それは共産主義化、社会主義化、あるいは何らかの政治的編成をもたらすのではなく、英知と慈悲心に基づいた、今までとはまったく異なった社会をもたらすでしょう。(『時間の終焉』より)

話がそれますが、いま、いじめや若者の自殺が社会問題になっています。私も十代の頃には自殺まで考えるほど悩んできました。そういう問題は、私の若い頃にもありましたし、はるか昔にもあったのでしょう。その種の問題が、マスコミでクローズアップされては消え、また、クローズアップされるという繰り返しだったように思います。

この時期は、いうまでもなく自意識過剰になります。そして、人と比較するばかりで、人の目を気にしながら自分を知るという術で虚偽の自己の殻が厚くなり、魂を覆ってしまいます。昆虫でいうさなぎへの変体のような時期で以前の幼虫のように自由に振舞えなくなってきました。人となにもかも比べて、その社会の価値観の中で自分はどのような位置かという視点でしか自分を見れない。もし、この時期に、天上天下唯我独尊とか、オンリーワンなどといわれても、言葉の理解にとどまらざるを得ないし、クリシュナムルティを読んでも、とても歯が立たないでしょう。

この時期、内面に向く意識のベクトルが過剰になり、繊細で悩み深くなり、ハツラツとしたものが失せてくる方が、むしろ自然というのは、経験者の共通認識でしょう。そんな若者たちは、無理解な大人たちからは、みにくいアヒルの子というように見られがちですが、みにくいアヒルの子こそ、クリシュナムルティの世界観と一生涯つきあい、美しい白鳥に化ける権利も、なかば手中にしていると思うのです。

ちょうど、カブト虫が、幼虫からサナギになり、成虫として羽ばたいたりするのと同じように、なくてはならない成長プロセスだと思うのです。サナギは、うっとうしい、グロテスクなどと言っても仕方ないわけです。本来、くだらないようなことを悩む青年期に悩まずに過ごしてしまうというのは、カブト虫が幼虫から一気に成虫になるようなものでは

ないでしょうか。

精神分析の権威である河合隼雄（以下敬称略）も、著書でその辺のことを指摘していました。現代の中年は、アイデンティティの危機の先送りをし、本来、若い時期に悩まなければいけないことを悩んでこなかったため、青春期の問題を中年になってから悩むようになっていたのだと。中年クライシスというのは、今では様々な解釈がありますが、やはり悩み慣れしていないという面が共通してあるでしょう。

幸いだったのは、私の若い頃には、そういう悩みに親身にこたえてくれる先輩が周囲にいたということです。哲学的、求道的な話のできる雰囲気もまだ残っていました。面識のない垢の他人の著者や経営者が、なんら見返りも求めず、忙しい最中、会ってくださるということもありましたし、そういう好意に甘えてしまったことも少なくありません。お陰で金のない一学生が、有料のカウンセリングに高額の出費をかける必要もなかったのです。

ともすれば、相手に暗くて不快な気分を伝染させてしまったり、ムードを壊してしまうような本音を言える場が、あちこちにありました。就職面接に臨むときに教わるような表面的な作法や取り繕いでなく、本音を語る癒しの喜びのようなものを知ることができました。その経験が、いまの自分をなによりも支えてくれていると思うのです。よく、家族が生きる支えだといいます。それはもっともですが、本音をなにも言えない、顔をうかがうばかりの仮面家族だったら、どうなるかを考えれば一目瞭然です。そういう状況では、表面では和気藹々と幸福に見えても、内面の悩みは深まるばかりで、そんな内面を隠さねばという虚栄心が、悩みの苦痛をさらに深めるようにもなるでしょう。

私の家は割とざっくばらんに話せましたが、親や兄弟には言いにくい本音があるということも事実です。それを補う人たちが周りにいて、若い頃にあらゆる本音を語り尽くす心地よさを知れば、実は社会に出てからのほとんどの人間関係が、クリシュナムルティのいうように虚偽に満ちているということもわかるようになるわけです。そういう経験をできないと、なにが本物でなにが偽物かわからないし、問題にぶつかるたびに適応できない自分が悪いと、うまくごまかすか、自分を攻めて途方にくれてしまうのではないのでしょうか。

これは、クリシュナムルティのいう、若いうちに、くつろぐとは何かを知らないと手後れになる云々ということの延長線上にある経験だったとも思うのです。ここでいうのは、もちろん、クリシュナムルティのいう「くつろぐ」という意味です。これについて、彼は『学びと英知の始まり』の中で、次のように言っています。

もし君たちがここで自分のなかにこの種子を持たなければ、世界は君たちを破滅さ

せてしまうのです。かれらは君たちを踏みにじるでしょう。かれらは狼であり、殺人者なのです——間違えないように。自分がすっかりリラックスしている、我が家のようにくつろいでいる——私がその言葉をもちている意味で——というこの気持ち、それが愛情のこもった責任感をもたらすのです。君たちがその種子を持ち、それがここで開花しているとき、君たちはそれを終始開花させ続けるでしょう。もし、それが働かなければ、そのときには世界は君たちを破滅させ、君たちをその思いどおりのもの——狡猾な動物——にしてしまうでしょう。

また、クリシュナムルティは、瞑想の大切さと共に、本音を語る大切さも再三、語っています。たとえば、『子供たちとの対話』の中で、こんな風にいています。

なぜ、君たちのほとんどは、そんなに黙っているのでしょうか。なぜ私と話し合わないの。どんなに下手でも、自分の思考と感情を表現することは重要です。なぜなら、それは君にとって、大きな意味を持っていくからです。なぜかを言いましょう。君はどんなにちゅうちょしようとも、今、思考と感情を表現しはじめるなら、大きくなる中で、環境や親や社会や伝統に潰されないからです。

やはり、程度の差はあるでしょうが、給料をもらっているような場では、かなりの割でひきかえの義務に従事せざるを得ず、自主性を重んじた社風としても、なかなか本音は言えないものです。それはそれで、また成長の糧になるでしょうが。そういう生活の繰り返しで、仮面の時間の占める割合が多いほど、いつしか自分でも心の中の本音を忘れてしまうでしょう。人生の問題を悩み、人と語り尽くしていくと、社会の中では、役割は役割として、いろいろな立場を演じ、協力して仕事をするのは当然ですが、一度そこを離れたらまったく違うこんな自分がいるということも客観的に見えてくるわけです。

そういうことがわかってくると、逆に、プライベートでも肩書きを背負ったままの自分を持ち込んできたり、お客さんへのマニュアルとして教わった表面的な応対をしている自分を礼儀正しく謙虚な自分だと思い込んでしまっている人が社会には少なくないということも見えてくるものです。クリシュナムルティのいう狼や殺人者とは、危害を加えたり犯罪をおかしたりするような人たちだけでなく、そういう人たちも狡猾な動物という表現で指摘しているわけです。これは、かつて日本人が揶揄されたエコノミック・アニマルというものにも通じているように思います。ただ、これは日本人に限らないようで、アラン・W・アンダーソンとの対話で次のように言っています。

クリシュナムルティ（K）　ですから世界中の司祭、宗教家が宗教を利益の対象にし、崇拝者と仲介者を作り上げてきたのです。商売に成り下がったのです。知識を売り物にする、紛れもない商売。身体的にだけでなく、内面的に、深く。こうしなさい、そうすれば悟れるといった。

アンダーソン（A）　徹底的に功利的、もうけ主義。

K　商業的。

A　ええ。

K　ですから、それに終止符が打たれないかぎり、私たちはますます墮落していくのです。

（略）どうか違った人間になってほしい、そんなふうに育たないでほしいと私はいうのです。で、私はそれを掘り下げて行って、いろいろと話して聞かせるのですが、するとかれらは見始めます。が、世の中はかれらにとって強すぎます。生計の資を得なければならぬし、子供が安定すること、良い仕事を得て、結婚し、家を持つことを望んでいる両親、そして世論に抵抗しなければなりません。（『生の全変容』より）

余談ですが、居酒屋などに客として入っても、店員さんがそこまで頭を下げて礼儀正しくしてくれなくてもいいのに、とすら思ってしまうことがあります。気の毒にすらなってくると思いますか。司馬遼太郎が、「いいにくいことだが、日本では卑屈が礼儀になっている」と表現をしているのも、うなずけます。もし、こういう類のもので本当に気分よくなる客がいれば、ちょっとズレてるし、こういう礼儀に慣れた客は、並の礼儀正しきくらいでは満足せず、店に苦情を言ってきたりするんじゃないでしょうか。（笑）

日常のほとんどの時間、自分が社会の役割に基づく人格を演じてるという意識がない人も多いわけです。これは思春期に、あまり悩まなかった人に多いように思います。どうも、この傾向は、思春期の人生全般の悩みの量や深さと比例してるようにも思うのです。もちろん、そういう無意識のものから生まれる美、母親が子に注ぐ愛情のようなもの、演技の役割を意識しない朴訥の優しさのようなものもあります。考えてみれば、おごるということひとつとっても、肩書きや相手より格上という意識があるからこそできるわけです。そして、ある種の人たちというのは、格上、肩書きのある人のいうことしか聞かないという現実もあります。肩書のない人を見ると、条件反射的にバカにしてしまうのです。

ただ、そういう親分肌で情のある上司と、自身の感情や思考の動きをつぶさに見つめている瞑想的な部下が接する時でも、お互い理解し難いものが出てくるものです。社会的ステータスを自分と思っている人というのは、そういうものを脱ぎ捨てると、急に不安に

なったり、苛立たしくなるからです。上下の関係しか築けず、横の対等な関係をされると、自分が軽く扱われているようで怒り出したりします。

もし校長が独裁的であるなら、自由と協力の精神が存在し得ないことは明らかである。一人の人物の強固な性格によって、いわゆる一流校がつくられることはあるだろう。だがそこには恐怖と従属が忍び入る。そしてよくあるように、ほかの職員たちは生気を失っていく。(略)生徒は自信がなく、模索しているが、先生は知識に自信があり、経験において強い。先生の自信と強さは、その権威をかさに着ようとする生徒に自信を与える。しかしそのような自信は長続きするものではなく、真実のものでもない。(『道徳教育を超えて』より)

誇りのようなものを理解するには、君たちは考え抜く力を持たなくてはなりません。それがどのように始めるのかを見、それがもたらす災難を見て、その全体を見なくてはなりません。それは、心が途中でやめずに最後まで追うように、とても鋭い興味を持たなくてはならないということです。君たちは、本当にゲームに興味があるときには、最後までやり抜くし、急に途中でやめて、家に帰ったりしないでしょう。しかし、君たちの心はこのような考えに慣れていません。そして、君たちがわずかな教科を学習するだけでなく、生の過程全体を探求するのを助けることが、教育の役割です。(『子供たちとの対話』より)

また、こちらが見返りなど求めずに何かをしようとする、その意味がわからず、疑ってくる人もあります。なにか下心があるだろうとか、得体のしれない宗教にはまってるんだろうと。(笑)実際、そういう詐欺もいるので気をつけなければなりません。ただ、やみくもに疑り深い人というのは、見返りを求めずやっているように見えても、ずっと後になってからの見返りを気にしていたりするものです。そういう自分を客観視できないため、無意識に人を疑ってしまうのかもしれない。

給料その他、直接的な見返りを求める行為は社会生活を送る上でやむを得ないことですが、対個人や取引相手同士のギブアンドテイクを超越したもっと大きな視野で見た霊的見返りや、内面の心地よさのような見返りを求めるのは、一步進んだ感じがします。

高額な報酬をもらっている人たちやセレブと言われるような人が陥りやすいのは、その額がそのまま自分の価値となり、すべての人をそういう尺度でしか判断できなくなるとい

うこと、お金を稼いでいる人ほど仕事量、収める税の多さなど社会への貢献度も高いと思
い込んでしまうこと、何をするにも金の刺激でしか動けなくなるなどでしょう。もちろん、
金持ちがすべてそうではなく、かつては、成金という言葉で社会がその種の人を特別扱い
する向きもありましたが、この辺りの淡水と海水の入り混じる入り江の境界もあいまいで
わかりにくくなってきたようです。

これを君にやるから私にそれをくれという風にしか考えられなくなっているのです。
私たちは精神的、肉体的にあまりにもコマーシャリズムに慣れているので、報酬、何
かを得ること、目的なしには何もできないのです。それはすべて取引、贈り物ではな
くて交換になっているのです。これを君にあげるから、それを私にくれ。私が宗教的
に自分を苦しめれば、神が私の元に来なければならない。それはすべて取引の問題に
なっているのです。（『生の全変容』より）

逆に、あまりに貧しい生活をしている場合、今度は生活に手いっぱい、それに振りま
わされるばかりで霊的な生活ができにくくなるわけです。この辺に関して、クリシュナム
ルティは、あなた達（いわゆる中流階級以上）からはじめなければ、明らかに貧しい人た
ちからは、始まらないでしょうと指摘しています。

私は、ソ連と中国を除き、世界中を旅して回ります。狭い部屋や広い部屋など、い
ろいろな部屋をあてがわれます。床の上にそのまま寝たこともありますし、銀のベッ
ドに寝たこともあります。種々様々な場所に寝ましたが、しかしくつろいできました。
（『学びと英知の始まり』より）

社会に出て様々な虚偽の人間関係の葛藤を経験をすると、ああ、やっぱり、人生とは芝
居なんだなというシェークスピア劇のセリフがピンとくるようにもなるし、ああいう戯曲
のよさもちょっとわかってくると思うわけです。こういって、特に、社会の役割を脱ぎ捨
てられない側の人たちから裏表のあるずるい人間だと誤解されるかもしれませんが、それ
は、手練手管で相手を騙し利用するということではありません。むしろ、そういう振る舞
いを意識してない人ほど、欲に取り憑かれ、それが遂げられないと急に自制の利かない別
の顔を見せたり、自社の商品を実体の価値以上に大きく見せるような弁舌が得意だったり
するものです。

そういう狼のような人が上司にいても、いちいち反発せず、命令を聞かなければならな

いというのが現実でしょう。こちらのそんな思いを誤解されないような振る舞いも必要になってくるわけです。そういう生活の中で、その上司も家に寝たきりの親がいたり、いろいろな問題を抱えていたりということがわかってきて、少しずつ同情や親しみが湧いてくるということもあるでしょう。社員旅行で見せる上司の顔は、また別だったりしますし、印象はその都度変わるものです。また、瞑想が進んでいくほど、相手への固定観念が薄れていくのではないのでしょうか。

そういえば、司馬遼太郎の「飛ぶが如く」という明治維新をあつかった小説で、西郷隆盛の上司が変わったときの描写に、そういう機微の一端がうかがえるようなものがあり、非常に共感して読んだことを思い出しました。西郷隆盛の場合、私などと比べてはるかに純粹でしたでしょうし、当時の、薩摩に漂う理想の男像やプライドもあったのか、心の嘆きを露骨に態度に表出して、ずいぶん、痛い目にあったようです。

これは私のつたない経験からの中途半端な考察かもしれませんが、クリシュナムルティのいう瞑想が進んでいくほど、一人でなにもしなくとも寂しくなく、不安や空虚感に見舞われることもなくなり、むしろ、人と接することがその心地よさを壊してしまうので人づきあいが煩わしくなったりするようです。私なども、ヒマラヤというのはさすがにリアリティがありませんが、将来、限界集落のようなところで仙人みたいな生活をできないかなと空想して楽しんだりすることもあります。この辺に関しての見解も、クリシュナムルティとインドによくいる精神指導者との違いの特長のひとつでしょう。クリシュナムルティは、山奥などに入るのは逃避にすぎず、この場で自分が変わり、周りに影響を与えなければならないと、こんなことをいっています。

自分の部屋に座ったまま、自分が暴力的かどうかを見出そうとしても無理なのです。私は自分が暴力的でないと思像することはできますが、しかし、真の試練、本音の行為は関係において起こり、それによって自分が暴力的でないかが見えてくるのです。それが本当の仕事です。で、もし君たちがそうすれば、とてつもない力が湧いてきます。なぜなら、君たちの人生が秩序立ったものになるからです。（『学びと英知の始まり』より）

私たちの住む世界がどんなに小さくても、もし私たちが自分自身を変革して、日々の生活の中にこれまでとは全く異なった新しいものの見方を導入することができれば、その時、私たちは恐らく世界全体に、また他の人たちとの広範な人間関係に、大きな影響を与えずにはおかないでしょう。（『自我の終焉』より）

外部のものを理解し、また外部の世界に競争や逃走や苦痛がどうして存在するのかを探ることによって、あなたは確実に内部に到達できるのです。すなわち、私たちが、外部のものを研究すればするほど、外部の競争や悲惨を生み出す心理状態を私たちは自然に理解できるということです。外部の状態は、私たちの内面の状態を表出したものにすぎません。（『自我の終焉』より）

自分が好きなことは一時的で、つかの間の願望かもしれないし、またもし他の人のことを思いやることがなく、自分の好きなことをしていたら、一緒に暮らすことができなからです。そのように、叡智は、いかにして共に暮らすべきかを見出すための自由を含んでいるのです。（『学びと英知の始まり』より）

瞑想的な喜びとはべつに、人と協力して何かをするときに生まれる生命の躍動感、高揚感のようなものもあります。この感覚は、むしろ、あまり相性のよくない、価値観の合わないような人と協力したときの方が、強くなるようにも思うのです。これに関連して、牛尾治朗が、「相性のよくない人と一週間くらい寝泊まりして共同生活をするほど、経営者の勉強になるものはない」と雑誌のインタビューでいっていました。

話を最初に戻しますと、二十年ほど前と比べて、今は、人生の根本について悩まなきゃいけない時期に、めいっぱい悩めないといえますか、人生全般を深く考えるのは意味ないという雰囲気、強くなっているように思うのです。あるいは、そんな悩みに広い視野で、本質をえぐるように答えてくれる大人が、限られてきているように思います。友達というのは、ただ、じゃれあったり、笑いあったりするだけで、その場のムードを壊してはいけないということで、心の実感を隠さねばならないような空気が、少しずつ広がり、腹の底をさらして心休まるという光景はドラマの中すら見当たらなくなったような気がします。

ちょうど、私が中学生の頃、ネクラ人間という言葉がテレビで流行し、そういう人を軽蔑したり、あるいはムード作りの発端となった面もあり、本来、心を洗うような静けさまでもが暗いと揶揄され始めました。その雰囲気からはずれる恐怖は私も体験済みです。この頃に、仲間外れにされる恐怖というのは、死の恐怖に匹敵するものでしょう。これは今にして思えば、浅はかな人たちが、ひとりになったときに襲ってくる恐怖から逃れたいという意思の現れ、静かで思慮深い賢人から自身の心の奥を覗かれる恐怖ゆえの先制攻撃的軽蔑だったとも思います。

もっとも、ここに来てリーマンショックや格差から生まれる数々の不幸な現象、東北

の大地震などが影響しているのかもしれませんが、暗い人、ネクラという悪口を、あまり聞かなくなりました。別の意味で、そういうことを口にする余裕のない人も増え、または口にするのが不謹慎だと子供でもわかるような環境が増えています。しかし、だからこそ、その悩みは、目前の生活をどうするかという範囲にとどまっているように思います。

特に大都会では。そして小さな町や村々でさえ、人はつねに外へ外へと目を向けつつあります。で、人間は多かれ少なかれ自然との接触を失いつつあるのです。（『生の全変容』より）

一見、ネクラと言われた人たちと似たような雰囲気でもニアックな趣味を持つオタクといわれる人は多数いますが、彼らは、専門的な趣味に執着し、外の世界に振りまわされるのみで、人生の根本問題をあまり深く考えたがらないようです。やはり、就職難の時代、社会にどう適応し、どこの学校や会社に入社するかというような悩み、それも私の若い頃以上に、給料の多さで職種に関係なく会社を選ぶという若者が増えたのではないかと思うのです。

かれらはただ、他の皆と一緒にながされていくだけです。ここでは私たちは、それについて考え、それについて見つけ、それについて尋ねているのです。何かに適合しないとどういう意味かわかりますか？それは社会の全構造に逆らうことです。道徳的にだけでなく、ビジネスにおいて、また宗教において逆らい、さらに全文化に対して逆らうこと、つまり、ただ一人立つことを意味するのです。その結果、飢え死にするかもしれませんし、お金も仕事も手に入らないかもしれません。しかし、ただ一人立たなければなりません。できるでしょうか？ そうするでしょうか？それが恐怖の一つなのではないでしょうか？ 人生で最大の恐怖の一つは適合に関するそれです。もし、適合すれば、他の人々と同様になります——で、それはずっと容易です。が、もし適合しなければ、全世界が君たちに歯向かってきます。ですから、問題は極めて深刻です。もし君たちが世界によく耐えるための英知をもたないかぎり、君たちは押しつぶされてしまうからです。（『学びと英知の始まり』より）

恐怖から何らかの要求に屈するだけの人たちには、生は決して助けにくることはありません。しかし、君が、「これが本当に僕のしたいことだから、追求していこう」というなら、そのときには奇蹟的なことが起きるのに気づくでしょう。君はお腹を空

かせたり、やり通すために苦勞しなければならぬかもしれません。しかし、君は単なる誰かのまねではなくて、価値ある人間になるでしょう。そこが奇蹟的なのです。

私たちのほとんどは、一人で立つことを恐れていますね。そしてこのことが若い君たちには特に困難なのはわかっています。なぜなら、この国（インド）には、アメリカやヨーロッパにあるような経済的な自由がないからです。この国は人口が過剰なので、誰もが屈してしまいます。君たちは「僕はどうなるだろう」と言うのです。しかし、君が持ちこたえるならば、何かが、誰かが助けてくれることに気づくでしょう。大衆の要求に反して本当に立つ時、君は個人であり、生が助けてくれるでしょう。

生物学には変種と言われる現象がありますね。それは類型からの突然の自然発生的な逸脱です。庭を持ち、特定の品種の花を栽培していると、ある朝その品種から何か全く新しいものが生まれたことに気づくかもしれません。その新しいものが変種と呼ばれます。それは新しいので目立ちます。庭師もそれに特に興味を持つのです。そして、生もそれに似ています。あえて敢行したとたんに、自分の中にもまわりにも何かが起こるのです。生は様々な形で助けにきてくれます。きてくれる形が君は嫌かもしれません――それは悲惨や苦勞や餓えかもしれません。しかし、君が生を招く時、ことは起こり始めます。しかし、私たちは生を招きたくないし、安全な駆け引きを行いたいのです。そして、安全な駆け引きを行う人たちは無事安全に死んでしまいます。そうではないですか。（『子供たちとの対話』より）

いまの日本はクリシュナムルティのいうインドほどでないにしても、職種を選んでも余裕がないということも、適合のことで頭がいっぱいにならざるを得ない要因としてあるでしょう。あるいは、仕事が細分化して、職種に関わらず、創造性を発揮しづらい、オートメーション化の一部を担うような似たようなものになっているということも、視野狭窄に拍車をかけているのかもしれません。

教育の真の目的は、君が成長する中で、本当に愛してすることに身も心も頭もすべてを込めてゆけるように、見出すのを助けることではないですか。

本当に何を愛してするのかを見出すには、たいへんな智慧が必要です。なぜなら、生計を立てられないことや、この腐った社会に合わないことを恐れているなら、そのときには決して見出せないからです。（『子供たちとの対話』より）

本当の生とは、愛してすることを自分のすべてをかけてやることなので、そのため

に、していることとしなくてはならないと考えることの間で内なる矛盾や戦いがあります。そのとき、生はものすごい喜びのある完全な融和した過程です。しかし、それは、心理的に誰にもどんな社会にも依存してないとき、完全に内的に覚めているときにだけ、起こりえます。そのときだけは、していることを本当に愛する見込みがあるからです。完全な革命の状態にあるならば、庭仕事をしようと、首相になろうと、なにか他のことをしようと問題ではありません。君たちは自分のしていることを愛するでしょう。そして、その愛から創造性のとてつもない感情が湧いてくるのです。

（『子供たちとの対話』より）

人間が機械の一部となり、人間が主になって機械やコンピューターを操るのでなく、オートメーション体系の末端で働くことの人間疎外の危険性について、かつては、フロムやカレンホルナイといった学者が、指摘していましたし、こういう類がベストセラーに入った時代もあったようです。しかし、これらの問題もいまでは、山に入って山が見えなくなってしまうかのごとく、誰も言わなくなりました。入社面接の時などは、いろいろと志望動機をいいますが、どうしても自分を騙し飾らざるを得ない面があります。これは、自分が社会のアウトサイダーの側になってこないと、意外とわからないものです。皆が面接官にできるだけ不快な印象を与えないようにと同じようにつつましい言葉と態度を受け売りで学んでいきます。

偽善的にではなく、本当に反抗しているのなら、こんなひどい状態を見ても自分は何も感じないというふりをしていられますか。（略）インドで私が「君たちは何を志望しているのですか？」と質問すると、「父は僕たちを技術者にしたいんです。医者になりたいんです。医者が必要とされているのです。優れた技術者になることによって、インドの助けになりたいのです」と多くの生徒が返事するのを聞いてきました。彼らの大半は職歴の見地から考えています。遅れている祖国を助け、社会事業をしたいのだと。それが君たちがしようとしていることですか？ みんな眠いのですか？

私はそこに悲しさがあるのだと思います、いまあるところの世界にではなく。世界はこんな風に嘘だらけで、欺瞞に満ちた政治家たち、お金のことしか考えない人ばかりです。もし君たちが正しい教育を受けないと、いつのまにかそこにはまりこんでしまうのです。（『学びと英知の始まり』より）

私たちがどのような動機で職業を選び、仕事をしているかを検討して見てください。

そうすればそれが単に生計を立てる手段ではなく、実は羨望に基づいていることに気づかされることでしょう。そもそも社会がこのようにできているので、それは絶えざる闘争の場であり、その中で私たちは常に何かになろうとしているのです。この社会は貪欲と羨望——優越者に対するあなたの羨望——を根底としています。たとえば、ある店員がマネージャーになることを望んでいます。ということは、その人物は生活の手段として仕事をしてるというだけでなく、地位や名誉を得ることに関心があるということを物語っています。こういう私たちの心のありかたから社会や人間関係の中に荒廃が生まれてくるのは、自然の成り行きです。しかし、もし「あなた」と「私」の関心ごとが日々の生活だけならば、羨望に基づかない、正しい生活の手段を発見できるでしょう。羨望は私たちの人間関係の中で最も破壊的な要因の一つになっています。なぜなら羨望は権力や地位への欲望を示しており、結局最後には、政治につながっているからなのです。両者——羨望と政治——は互いに密接な関係にあるのです。一人の店員がマネージャーになろうと望むとき、それが戦争のひきがねとなる「武力外交」を生み出す原因となり、結局、その店員は戦争に対して直接の責任を負うことになるのです。（『自我の終焉』より）

これからは、いろいろ美辞麗句で志望動機を飾りつつ、ほかに就職先がないから、単にほかより給料が高そうだから政治家にという若者も出てくるんじゃないでしょうか（笑）。これはけっして冗談ではなく、実際、そういうものが、つい口から出てしまったというような一年生議員のコメントを聞いたことがあります。もっとも政治家になるということは、どんなに時代が変わっても容易なことではないでしょう。

たしかに、多くの人が思うように、考えるほど憂鬱になり、逆に自殺を助長するということもあるかもしれません。だから、よけいに社会の風潮も、あまり悩まない方がいいんだというようなことで納得するようになるのかもしれませんが。テレビも、私の若い頃と比べて、特に家族のそろそろゴールデンタイムに、芸というより大人の悪ふざけの目立つお笑いやバラエティ、受験生時代の名残を惜しむような無味乾燥とした知識の受け売りが目立つクイズ番組のしめる割合が圧倒的に多いですし、子供むけの番組にしても、世界昔話や日本昔話のような真理に通じた良識なものは見かけなくなりました。

また、ラジオも、ノリのよさばかりで、子供電話相談室のような、子供の突拍子もない真面目な質問に、ユーモアをおりませながらも真摯に向き合うという類や、しぶくて落ち着いた感じのアナウンサーの硬派な音楽番組もなくなりました。私ごとで恐縮ですが、家が電気屋を営んでおり、子供時代から階下の店でラジオがひっきりなしに流れていました。

夕方の子供電話相談室や、若山弦蔵の味のあるナレーションの音楽番組では、かつての情緒を揺さぶる映画音楽などが中心で、夕日を仰ぎ見るような恍惚とした思いに浸ったものです。いま、父が店をやっていたら、果たして昔同様、ラジオを流しているだろうかと思えます。

たしかに、ものを考えるというのはそれに翻弄されると、生命力がそがれていく面があります。よく、精神世界の分野でも、考えるのはよくないといっているのを聞きます。これは、悲観的に悩むのはエネルギーが枯渇するからよくないということだと思えます。禅の指導でも、考えるな、直に見て取れと言います。

人は問題にぶつかった時、悩んで一日中そのことを考え続け、睡眠中もそれが続き、翌朝、起きたときもその悩みで疲れてまた一日中考え続ける——それは、まるで骨を噛む犬のようなものです。私はみなさんがそんな御自分に気づいたかどうかは知りません。あなた方は昼間も夜中も頭脳がすり減るまでずっとその状態です。そして、たぶんそれがすり減った時にあなたがたは新鮮なものに気がつくでしょう。（『英知の探求』より）

なんとしても就職したい、自分にはその道しか考えられないと信じてる若者が、さらに一年も二年も就職できないとなれば、当然、悩みは深まり悪夢にうなされるようにもなるわけで、思慮が憂鬱な気分とからみあって化学反応を起こしながら頭の中を膨張してくるので、一層、本人も耐え難くなります。そうすると、表情も冴えなくなり、まわりから心配されたり、あまり考えすぎるなといわれたりすることもあるでしょう。逆に、火に油を注ぐように、はやく働けとなじってくるような親もいるようです。この軋轢が発展したのではないかというような事件もニュースでよく見かけるようになりました。事情はそれぞれ違うでしょうが、親が時代の変化を観察できず、昔の価値観というバイアスをかけて現象を見てしまう、そこから外れた人間はすべてダメなんだという思い込みにもあるのではないのでしょうか。

考えすぎるなという助言は、ある場合には、的確だと思うのです。そうなって焦れば焦るほど、ろくなことを考えなくなるというか、悲観的な空想ばかりが勝手に頭を駆けめぐらようになるものです。机上の観念をグルグル悩むというんでしょうか。そういえば、グルジェフも、悲観というのは、八つ目の大罪というようなことをいっていたようです。ただ、助言どおりに悩まないというのも、悩みに翻弄されてくると、できないものです。瞑想ができてくれば、悩むも悩まないも、ある程度自在になってくるのでしようが、若い頃

には、とても無理でしょう。

人々はこの世界の悲しみに気づいているのでしょうか、このとてつもない悲しみを感
じているのでしょうか？ かれらは自分自身の悲しみにばかりとらわれているので、イ
ンドや中国や東アジアの貧乏人の悲しみ、一日一食も食べられない人々、きれいな衣
服や快適なベッドを知らない人々の悲しみが目に入ってこないのです。（『生の全変
容』より）

クリシュナムルティ（K） 情熱は、悲しみという言葉から来るからです。その言葉の
語源、元々の意味を調べて見たことがあるかどうか知りませんが、情熱という言葉は苦
しみから来ているのです。

アンダーソン（A） 感じること。

K 感じること。人々は苦しみから逃避してきたのです。それは美と深い関わりがあると
私は思います。ただし、あなたが苦しまなければならないと言っているのではありません
ん。

A わざと苦しまねばならないということではない。（『生の全変容』より）

悲観を経験しなければ、悲観を超える経験もできないでしょう。いまでも地方にいくと
わかるのですが、素朴で好感の持てる人柄の人は、都会よりも少なくありません。私もそ
ういう人と接する時、癒されるような気になります。しかし、悲観や孤独のときが少ない
からかとも思うのですが、知覚や言葉の深みに欠ける面があるのは否めないでしょう。ま
た、人に合わせることには慣れていても、独自の見解を持ったり、行動したりできないも
のです。そういう人たちが独立性の強い人と接すると、急に感情的になって反目したりも
します。また、現代の若者たちには、出世主義からかけ離れた、あまり不満もないような
感じで、地味な生活の中にささやかな幸せを見出してる人もおり、好感がもてます。しか
し、やはり、何かが足りないという感じがします。

私は多くのいわゆる修道士、有能な社会事業家と言った、自分が立腹しないように
自分のことを鍛えてきた人々のことを知っています。しかし、本当の炎が消え失せて
いる。かれらはそれを持ったことがないのです。かれらは親切で寛大な人たちで、君
たちを助けてくれ、かれらのお金や衣類を恵んでくれ、宿をあてがってくれるかもしれ
ませんが、しかし、本物はどこにもありません。（『学びと英知の始まり』より）

どうかこれを自分で実験してみてください。最初に私たちは心をかき乱されなければなりません。しかし、私たちはたいてい、心をかき乱されたくないのです。私たちは生活の規範——精神的指導者とか信念というようなもの——を発見したいと思い込み、そこに居座ってしまうのです。それはちょうど、聞こえの良いお役所仕事を得て、そこで生涯働き続けるようなものです。私たちは心がかき乱されたり、不安を感じたり、頼るべきものがないということの重要性がわからないのです。こういう不安の中でこそ、あなたは発見し、観察し、理解することができるのです。しかし、私たちはたくさん金を持ち安心していられる人間になりたいのです。そうすれば、心をかき乱されることもないでしょうし、またかき乱される必要もなくなるからです。不安というものは、理解のために欠くことのできないものです。（『自我の終焉』より）

不満なために結果を追求したり、心が動揺することを嫌って、何としてでも静かで平和でいたいがために不満をなだめようとするときには、明快に考えることはできません。しかし、あらゆるもの——自分の先入観、信念、恐怖——に不満で結果を求めていなければ、そのときはまさしくその不満によって思考の焦点が合うでしょう。

老いても若くても、私たちのほとんどは単に何かを——もっと多くの知識、もっとよい仕事、もっとよい車、もっと多くの給料——を欲しがるために不満です。私たちのほとんどが不満なのは、ただ何かを「もっと」ほしがるためなのです。しかし、私はそのような不満の話はしていません。明解に考えることを阻むのは「もっと」ほしいという欲望です。ところが、何かが欲しいからではなく、何が欲しいのかをしらずに不満で、仕事や金儲け、地位や権力を求めること、伝統、持っているもの、持てるかもしれないものが不満で、特に何がというのではなく、あらゆるものが不満であるなら、その時には、その不満が明快さをもたらすことに気づくだらうと思うのです。受け入れたり従ったりすることなく、質問し、究明し、精通する時、そこには洞察があり、そこから創造性や喜びが生じてくるのです。（『子供たちとの対話』より）

あまりに考える練習に慣れていないために、免疫ができておらず、ちょっと悲観的な事態に直面すると、すぐ自殺してしまうというようなことも、あるのではないのでしょうか。

伝統の圧力を理解して耐えるには、強さではなく、自信を持たなくてはなりません——物事を自分でどのように考え抜くかを知るときに出てくる、すさまじい自信です。

(『子供たちとの対話』より)

悩むのは辛いから、そういう煩わしい問題から一気に目を逸らそうというのが一番多いパターンでしょう。まったく進路を変えてしまうこと、先の就職の例でいえば、大企業志望から中小企業志望に乗り換えたり、アルバイトでも仕事につけばいいやと考え直したりすることでしょう。これは、逃避したと悪く言われることも多いですが、さまざまな伝記などを読んでも、方向転換がむしろ運命のいい流れに目覚めるきっかけになるといいますか、的確な判断であることも少なくないようです。運命が悪い方へしか向かない逃避というのは宇宙の広い視野からみればないのかもしれませんが、多量の酒を飲んだり、遊びに翻弄されるといったようなことは、少なくとも普遍的な人間観で見れば勧められないでしょう。子供の仕事は遊ぶこと、と母から教わったこともあり、これは真かと思いますが、テレビや携帯、ネットいじりに明け暮れるというのはどうかと思いますし、現代は、子供の遊びといっても自然と密着したものは少なくなるいっぽうで複雑になっています。いずれにせよ、悩みからの逃避に娯楽の数々を使うべきではないと思います。

人は、自分を目覚ましておくために、たえず娯楽を求めています。慰められ、なんとしてでも自分自身から逃避したがるのです。これは事実です。教会はそれに手を貸してきました。そして現在はスポーツ——フットボール、クリケット、等々——が大娯楽となっているのです(『私は何も信じない』より)

これらは、やってる最中に悩みを忘れられるのはいいのですが、圧縮し続けた悩みのバネは、いつしか、大きなエネルギーをため込んで反発してくるでしょう。そうになると、そういう娯楽の最中にすら、魂の不安に見舞われるようになり心底、楽しめなくなるでしょう。少なくとも、あなたがみにくいアヒルの子の側にあるならば……。

あるいは、こういう糸口から、精神世界や哲学、宗教といった世界に入ってくるという人もいるでしょう。しかし、私が見る限りでは、こういう糸口から入ってくる人には、ちょっとズレたような教義を好み、引き寄せられる人が多いように思います。人と比較した自分しか知らず、魂からものを見るような見方がなにも出きていないため、知らず知らず、自分本位の欲求を満たしてくれるような教義にひかれ、騙されたり、カルトのような集団に入ってしまう危険もあるわけです。そして、そういう人たちが凶悪犯罪を犯し、彼らの何人かがクリシュナムルティを読んでいたりと、クリシュナムルティに偏見を抱く人が世間に多数出てくるわけです。これは、釈迦でも、キリストでも同じ、どうも宇宙

の法則の一部ではないかとすら思ってしまいますね。覚者と言われるような人の周りには、かならず、イメージをけがすようなことをする人が現れるようです。

そういえば、クリシュナムルティが若かりし頃、イタリアで軍幹部相手に講演し、その後、しばらく体調をおかしくし、クリシュナムルティ本人が、何か食事に細工されたのではないかと疑っていたというエピソードを聞いたことがあります。また、一人で散歩していたところ、FBIの人間から、なぜ、あなたはいつも一人で行動するのですか？と尋問されたそうですが、あるいは監視の対象になっていたのかもしれませんが。ラジニーシが獄中に入ったいきさつも、詳しく知らないので軽はずみには言えませんが、ちょっとどうかという面もありますし、各国の識者、著名人からも批判が多数飛び出したと聞きます。また日本でいま、まともな活動をしている宗教団体も、創業期には公安の弾圧にあたりしています。

さて、これはかねてから疑問に思い続けたことですし、考察に自信がなくなりもするのですが、こういう娯楽のオモチャの類に夢中になりながら、一生を乗り切ってしまうような人が、多数いるのではないかとも思うのです。

いつまでたっても、魂の飢餓、霊性から突き上げられる恐怖というものに見舞われないといえますか。かつて、スターデイリーというギャングのボスが、獄中で改心し、刑務所で伝道をやり始めたそうですが、そこに犯罪仲間から恐れられる、恐怖知らずの悪党がいたそうです。その悪党について、デイリーは、あれは実は恐怖なんだ。霊性の恐怖がああいう堂々たる振る舞いをさせるんだと喝破したそうです。

ほとんどの人はこういったことに無関心です。本当に真剣な人はごくごくわずかです。九五%は、「そうですね、もし楽しませてくれるなら受け入れますが、そうでなければけっこうです」と言うでしょう。（『私は何も信じない』より）

今までとは異なる（暴力のない完全に内的に自由な）生き方を発見することにその時間もエネルギーも、すべてのものをあたえる人。私はそのような人を「まじめな人」と呼びたい。彼は、遊んでいても彼の方向はセットされているので簡単には遊離しません。（略）彼はそのまじめさにおいて自己中心的になるかもしれません。しかし、真の自己中心は調査を妨害しますが、彼は常に他人の意見を聞いたり調べたり疑問を抱いたりしています。彼は高い感受性を持っていなければなりません。彼は常に聞き、追求し、探求しています。（『英知の探求』より）

クリシュナムルティ (K) それゆえにこそ、賢者と交際して生きることがいいのです。人をバカにしたりしない、真に賢明なる人と共に生きることが。真の知恵は、本を読んでも、知恵を教えてくれるクラスに出席することによっても生まれません。知恵は、自分を知ることと共に生まれるのです。

アンダーソン (A) それは私にヴェーダの賛歌を思い出させます。それは、弁舌の女神は、友達の間以外けっして姿を現さないというのです。

K なるほど。

A すばらしいことです。実際それは、あなたが触れた思いやりや愛情がないかぎり、そしてそれは注意と同時なのですが、たわいもないおしゃべり以外のなにものでもないのです。

K もちろん。

A たわいもないおしゃべり。

K それこそは現代世界が奨励していることです。（『生の全変容』より）

私なりに、このことを考えてみますと、そういう気をまぎらす媒体が、私の若い頃と比べて格段に増えたということも一因にあると思うのです。ですから、ひとつに飽きがきても、次々に、ゲームを変え続けられるというように。また、おいしいものを食べられる店もたくさんあり、日本では不況といっても、グルメが金持ちだけの特権ではなくなりました。

特に、バーチャルものというのは、基礎的な人間らしい集中力ができてなくとも、すぐのめりこむことができるものです。ネットなども、無作為にいじっていると、あっという間に時間が過ぎてしまいます。しかし、そういうものに繰り返しのめり込んだ後のある種の心地悪さのような感覚が普通は歯止めになってるわけです。それとは違うもっと高いレベルのことでしょうが、クリシュナムルティは、いっています。

ですから、どのようにして私たちの心にこの本当のものを開花させたらいいかを私は見出したいのです。いったんそれが開花すると、けっしてそれを壊すことができないのです（『学びと英知の始まり』より）

私の親戚の医者なども、いい年をして、人が持ってきたファミコンゲームに徹夜で没頭したかと思ったら、二度と手をつけませんでした。（笑）それにのめりこむことを抑え込むような何かが体内にあるわけです。ただ、子供はまだそういうものが希薄でしょうし、

アルコール依存性の人がよくないとわかっていながら酒をやめられないように、娯楽依存症、ネット依存症という病気もあるのでしょうか。それらは、酒ほど体に直接的な悪影響として目にわかる形で現れないし、悪く言われないので、感覚の鈍磨した人達は、ますます自覚がなくなっていくのでしょうか。また、こういう人たちは、狡猾な動物たちからすれば金のなる木であり、ビジネスの絶好の餌食でもあるわけで、マスコミも批判しにくいのかもしれません。

また、そんな疑問に関連して、これはちょっとグロテスクな説ですが、コリン・ウィルソンが、人間ウーパールーパー説というようなことをいっています。ウーパールーパーというのは、幼魚で成長が止まったまま、その姿で固定して遺伝子を引き継ぐようになったということです。ある湖でだけ、水の成分の比率の影響でそういう不思議な現象が起きたということです。

つまり、どうも人間にもそういう面があるのではないかということです。なにかの原因で魂の成長のようなものが止まってしまい、成長できなくなってくるのだと。ここまで大胆な言い方はしてませんが、文豪ヘッセの小説などには、幼児人間などという表現が繰り返して出てきますし、ガリバー旅行記に出てくるヤフーというのも、半熟人間という意味だと聞いたことがあります。これはあくまでも一説ですが、いまではネットで超有名なヤフーというロゴも、そういう開き直りの精神から生まれたそうです。(笑)

こういうアブノーマルな説で、先の現象を見れば、納得できる面もあるでしょうが、こういう考えは、羨望の裏返しの人種差別やヒトラーの危険思想のようなものと結びつきやすいので、あるものが体内に開花してこない限り、あまり口にすべきでないでしょう。

かつては、出版社に限らず、マスコミ全体に、こういうことを訴えて啓発していかうとか、世の中を改革して行こうとかいう会社の哲学があり、文学者にも芸術家にも評価されているだけで満足しないような骨っぼいところがあったように思います。あるいは、過去の松下幸之助や本田宗一郎といった起業家の本を読んでも、何もない日本に壮大なスケールで物を生み出していく物心両面の幸福追求というロマンみたいなものが会社に充ち、土光敏郎のような骨っぼい人が経団連会長になったり、ソニーの井深大にしても幼児教育の研究をしたりと、社会の大河の流れも河口までその影響を少なからず受けていたように思うのです。

質問者 もしあるとすれば、いかなる点でかれらは（芸術家）は世の中の役に立つのでしょうか？

クリシュナムルティ われわれの多くよりも生に対してより感受性があり、敏感であ

ることによってです。芸術家は、我々をしてあらゆる部類の新しい感覚に気づかせることができます。しかし、新しい感覚は、ただたんに新しい表現形式を意味するわけではありません。ほとんどの現代芸術、または現代詩、および小説は、表現の目新しさに夢中になるあまり、身動きが取れなくなっています。芸術家は、まず何よりもあたらしい気づき、語るべき何か新しいことを持つべきであり、そうすれば形式は自ずから新しさと新鮮さを身につけるでしょう。しかし、現代の芸術家たちは、内面的にいかにも不毛で空虚であるように思われます。（『私は何も信じない』より）

これと全く同じ見解をトルストイも芸術論で披露しています。

それからさらに四十年後の現代は当時と違い、不必要とすら思える物に満ち、あまり必要と思えないものまでも強引に営業力や広告を駆使して売るというニュアンスの強い社会になっているわけです。志を忘れた、いわゆるサラリーマン経営者が大企業を牛耳る社会では、当然、会社も人も体制維持に傾く傾向が強まり、日々の仕事も人間の根本問題から遠ざかり、近視眼的な目標になるでしょう。

格差も広がり、椅子取りゲームの椅子の数も減り、競争意識も募るでしょう。当時、高卒の私でも入れたような会社に、大卒が、何百人も押しかけるような時代ゆえ、止むを得ない面はありますが、人生の根本を哲学的に悩んで未だ求め続けてる人たちからすると、そういうのはちょっとスケールの小さい小人的悩みとも思うのです。

子供のことを心配している母親、台所のことを心配している主婦、自分の人気や議会での地位を心配している政治家のように、心は何かにとらわれたいのです。そして、とらわれている心には問題を解決する能力がありません。わかるでしょうか。はつらつとして問題を理解できるのは、とらわれていない心だけなのです。（『子供たちとの対話』より）

もちろん、いま、その就職問題の渦中にいる人たちからすれば、このようなことをいわれて腹立つばかりでしょう。あるいは、逆に、そういう哲学的な悩みを持ったことのない人たちからすれば、私などは、なんの得にもならないことを悩んでいる暇な変人、あんな風になりたくないくらいにしか映らないでしょう（笑）こういう人たちとの本音のギャップは、私も、ときどき耳にしました。こういうタイプの本音は口にするかどうかはともかく、世代を超えて共通したもので少なくありません。

この話と並行しますが、現代は、一見、テレビなどでタレントが本音を語っているように見えて、実はムードを壊さないように顔色をうかがっているだけという稚拙で下品な本音といますか、本能的なものをひきあいにして、同じようなのがいる、自分より劣っているのがいるというようなことで安心できるという本音。そういうステレオタイプな本音でつながって、仲間意識を持つような面が強いのではないのでしょうか。

あるいは、批判をするにしても、こういう批判なら視聴者に受けがいいからというように、うまくツボをおさえた、視聴者や広告主の顔色をうかがわざる得ない本音に偏っているようにも思うのです。これは、報道番組やニュースにも言えることでしょう。情報入手の発信元が共通してるということなのかもしれませんが、どのチャンネルも情報を横流し、たらいまわしにしているという感じです。

日本の出版界には、クリシュナムルティと同時代には、会田雄次、草柳大蔵、山本七平、司馬遼太郎、梅原猛、中村元、大衆週刊誌でも扇谷正三といった、単なるもの知りではなく、クリシュナムルティのいう知覚、感受性に溢れ、知識が知性の段まで降り、感情や国の枠といったものを超越した目で本質を射抜くような芸術的な批評家、知性人が少なからずいましたし、彼らが中心になってイデオロギーを動かしていました。

反逆といっても実は二種類ある。まず暴力的な反逆ということ——これは何もわからずに現存の秩序に対してただ反抗するだけのものである。次に、知性の根源における精神的反逆というものがある。既成の権威に反抗しても、それが新しい権威になり、幻想とかくれた自己満足だけのものになってしまう大勢の人々を、私たちは見かけている。つまり通例起こることは、私たちがある集団や理念と手を切っても、今度は別の集団と理念につながっていくということなのである。こういう仕方は、ちょっとした新しい思想形態を作り出すだけで、やがてこの新しいものに対しても反逆することが始まるということである。たんなる反動は反対を生み、この種の改革は安らぐことを知らない。

だがこれに対し、たんなる反動ではない賢明な反逆というものがある。これは自分の思想や感情を自覚することによって、自己認識をしていくことに伴う反逆である。それは私たちが、進行しているままの経験を直視し、めざめた知性を持って苦難を逃避しない時に生まれる。いまめざめた知性といったが、それは直感といってもよい——この直感こそ人生における真の指標なのだ。（『道徳教育を超えて』より）

どうも私が二十代の中ごろあたりから、活字離れ、出版危機が叫ばれ、背に腹は変えら

れず、売らなければ会社を維持できないということで、大衆迎合に走り、木を見て森を見ない視野の狭いイデオロギー、感情や感覚に訴えてあおることで売り上げを伸ばすような類、海外で売れたものの横流し、芸能人、スポーツ選手、有名人が書いたもの、要するに、本を出す側の知性があまり感じられないのです。出版経営に関わったことのない私がこんなことをいうのも生意気なのですが。

古本屋でも、ブックオフのように素人でも判断できる値決めマニュアルを作り出して成功したチェーンが出てきたり、こういう店では軽めの朝食といった本しか売ってないわけです。専門家すら、先のスケールの大きい知性人と、皮相的な知識人との違いがわからなくなっているようにも思います。

そういう時代にインターネットというツールがでてきたというのは、ある意味で神からの贈り物、入れ知恵なんじゃないかという気になります。もちろん、ネット情報はウソも多く、よく言われている欠点も多数あります。しかし、偽物が社会の上流にまで君臨するようになったこの時代、ネットがなかったらと思うとぞっとします。もっとも、どうなっても、「真理」という生き物は、しぶとくこの世に姿を現わすための手段をなんとか考え出すのかなとも思います。

それと私たちは、大新聞、大マスコミからの情報は、盲目的に信じてしまう傾向にありますが、「トレーニングデイ」というハリウッド映画の中で、このあたりのことを皮肉る面白いやりとりがでてきます。ある刑事の男が、喫茶店で新聞を読んでいると、突然、部下が現れ、話しかけてきます。すると、話しかけられた上司は、こんなことを言います。「俺はいま、新聞をよんでいる。新聞というのは、九割は嘘が書いてある。だが、楽しませてくれるから読むんだ。話しかけてくるなら、もっと面白い話をしてくれ」

これはピンとこないと思いますし、新聞の九割がウソなんてアメリカってそんなにひどい国なのかと人ごとのように、あるいは、優越したように捉えている人もいるかもしれません。（笑）しかし、九割という数字はともかく、日本も大差ないと思うのです。皮層的な情報、偏った情報というのは、一つ一つは正しいように見えても、そればかり出していると嘘にすらなってくると思うのです。例えば、景気が悪い悪いといいつつ、発展してる会社もたくさんありますし、生活に困らない金持もたくさんいるわけです。実際、テレビで景気が悪い悪いと言っている人は、みな富裕層でしょう。よく、実感のないことを繰り返し言えるなと思いますね。（笑）

また、不況とかデフレ云々の問題も、かつてとは中身が違うと思うのです。車も家電製品も何もない時代には、景気がよくなるのは当たり前ですし、これだけ必需品が行き渡れば、お金の使い道がなくなってくるのは当然です。それと同時に、大量生産の技術が格段

と進歩し、一〇〇円ショップで売っているものの質の良さには驚くばかりです。さらにまだ進化しています。機械の仕事が増えて行くので、ますます、人手はいらなくなります。平均寿命も延びて、年金も足りなくなり、いつまでもお年寄りが働かざるを得なくなり、いやな言い方ですが、若者のポジションは、ますます減って行きます。かつての、生きのいい漫才をやっていたビートたけしなら、強烈なブラックジョークを飛ばしていたかもしれません。

ガソリンスタンドもセルフが増え続けています。わたしも、これまでは原付バイクに乗ると、せいぜい、五百円分くらいのガソリンしかタンクに入りませんから、店員さんにいられてもらうのに気が引けて嫌だったのですが、自分で勝手に入れられるので正直、ホッとしているという感じです。また、原付がちょっと故障しても、ネットでほとんどの部品が安い値で買えます。クリシュナムルティも、自分で車をばらしたりしたそうですが、こういうことも、自分でやれば、専門バカにならずにすむわけです。

もし私がほかの人よりもあることをよりよく行う能力を持っていると、そのために一方に偏した生き方に陥りうるのです。私は一個の人間であり、とてつもない諸々の能力を備えているのです。私はこれらすべての能力を行使しなければなりません。さもなければ、私は人間ではなく、たんなる専門家・技術者になってしまうのです。もし君たちが「本当は音楽とか、あるいは日中の美しい光景を見つめるといったことには関心がないんです。数学をするので、放っておいてください」といえば、私は「君たちは精神薄弱だ」と言うでしょう。（『学びと英知の始まり』より）

ですから、そもそも、昔の型にそのまま社会を戻そうということ自体、無理があると思うのです。しかも、三十年前の教科書の学説をもとに作り直そうというんですから。（笑）一時的に好転することはあっても、すぐ反動がくることは目に見えています。こういうことは、歴史を見ても明らかですし、司馬遼太郎も、日本は静かな停滞期に入ったのだろうと言っています。現代でも、五木寛之が、日本は文明国の宿命である下山の時期に入ったのではないかと指摘しています。

クリシュナムルティは、人間が数日かけて行う計算を数分でやってしまうコンピューターがある。人間が四時間しか働かない、そういう時代が来たときに、我々は何をすべきかと問題提起しています。

私たちは、怠けることは悪いと考えるから、怠けているのを非難します。それで、

怠けるとはどういうことかを見いだしましょう。気分がよいのに一定の時間を過ぎても寢床にいるなら、怠けているという人たちがいるかもしれません。元気がなかったり、他の健康上の理由のために、遊んだり、勉強したりしたくなくても、それもまた怠けているという人がいるかもしれません。しかし、本当に怠けるとはどのようなことでしょうか。

心が自分の反応や微妙な動きに気づいていないとき、そのような心は怠けていて無知なのです。試験に受からなかったり、多くの読書をしていなくて、ほとんど情報を持っていなくても、それは無知ではありません。本当の無知とは、自分について知識を持たず、自分の心がどのように働くのか、自分の動機、応答がどうかについて知覚を持たないことなのです。同様に、心が眠っているときには、怠けているのです。そして、ほとんどの人々の心は眠っています。（『子供たちとの対話』より）

そういう時代に、長時間会社で働くことこそ勤勉で人間らしいという価値観のもと、強引に人間の仕事を作り続けようとするれば、仕事はつまらなくなり、疲労もつり人間の心は荒み、犯罪も増えるでしょう。そういう疲労した、ぼんやりした人たちが視聴者の多くを占めれば、テレビの質もそれに合わせた嗜好になるのは当然でしょう。

近代の教育は、人間を無思想な存在にしてしまっている。それは私たちが本当の転職を見いだす手助けはしてくれない。私たちは試験に合格し、幸運があるなら就職できる。ところがこの就職は、生涯に渡って平凡きわまる事務に忙殺されることを意味している。私たちは自分の職業を好まないかもしれない。だが、ほかに生計の資を稼ぎ出す手段がないという、ただそれだけの理由でその職業に留まらざるを得ない。私たちは何か全然違ったことをやってみたいと思う。だが会社との約束があり責任があるので、あきらめるほかはない。そして私たちは憂慮と恐怖に取り巻かれた生活を続ける。本当に満足しているわけではないので、私たちはセックスや飲酒、政治や新興宗教にはけ口を求める。（『道徳教育を超えて』より）

テレビでやってるようなお茶らかしや、じゃれあいも、たまにはいいと私も思いますし、程度の問題でしょう。そのことで人とのコミュニケーション、親密度が増すこともあるでしょう。ただ、そういうこともテレビを傍観者としてぼーっとして見ているより、現実の人間関係の中でやったほうがいいように思います。そうすれば、いろいろ、されたり、いわれることで嫌な思いもするでしょうし、いきすぎたり、飽きたりということもわかるで

しょう。ときに、まじめに仕事に取り込んでも人の息抜きにもなると思います。

こうすることで、イジメの問題の核心も、見えてくると思うのです。そのお茶らかしが、少しずつ増長して行って行きすぎて、いじめになることも少なくないわけです。その場合、いじめめる側は、いじめられている側の気持ちがわかっていないわけです。いじめられる側も、お茶らかしとして楽しんでいた時期もあったかもしれません。いじめられる側も面白がってるんだからいいんだと思って知らず知らずに増長して行ってしまふ。たまにそういうことをやるか、しつこくなるかでも、ずいぶん違います。だから、そういう場合には、いやなんだという意思表示をしなければならないわけです。ときには、相手に同じことをして、どういう気持ちがするかわからせなければならない場合もあるでしょう。それが自分だけでなく、相手のためになることだってあるわけです。そういう強い態度を見せると、案外、すぐに、からかいはおさまるものです。

しかし、いじめられるタイプは、なかなか、そういう意思表示ができないというのが現実かもしれません。また、いじめめる側は、別の弱い人間を探してまた同じことをする。表面上は違っていても、それと同じからくりの人間関係は、社会に出てからも永遠と続いて行くわけです。ですから、本当は、こういうコツも、バーチャルの世界に隠居するのではなく、そういう身近な関係の中からつかんでおいたほうが、いいわけです。よく、精神世界で、人生の傍観者たれといわれ、釈迦などもそういうニュアンスが強いですが、これは執着、翻弄されないということであって、バーチャル世界の様を離れて見ている人たちは、バーチャルに翻弄されてしまっているわけです。

最近、巷でよくある凶悪事件でも、被害者が人が良すぎて、いいなりになるというケースが発展して、恐喝や殺人事件になっていくというようなことが少なくないように思うのです。これらも、似たようなからくりで、相手も、いいなりになりやすい人間を本能的に、見抜くわけです。こういうタイプを狡猾な動物と表現するのは、誰も抵抗ないでしょうし、さきのクリシュナムルティの表現した人物像も、こういう人たちだと、とらえる人は少なくないでしょう。

こういう事態に直面したら、より反抗が難しいでしょうが、やはり、なにをすべきか考え抜かねばならないわけです。ただ、いいなりになっているだけというものも、罪かもわかりません。

最近、兵庫で女ボスが犬の男たちを従えて、複数の殺人に明け暮れていたという事件が明るみに出ました。不謹慎かもしれませんが、もし、自分があの事件に巻き込まれたら、どういう行動をとっていただろうかと冗談半分に話し合ったことがあります。被害者の一人の男性は、東京まで逃げて潜伏生活を送っていたにもかかわらず、拉致され連れ戻され、

拷問のあげく殺害されたと言います。警察は、何もしてくれなかったと言います。

これは全くの机上の空論ですし、いざ私がお場に置かれたら為す術なく同じ目に合うかもしれません。しかし、少なくとも、必死に考え、あらん限りの抵抗をしようと思うのです。こういう場合、どうせ自分が殺されるなら、その前に、女ボスを殺すくらいの気迫も必要じゃないでしょうか。そうしないと、彼らの悪は止まらずに、犠牲者は増えるわけです。実際、そこまで考える余裕もないでしょうが。

ダンテスダイジという神秘家が言っていますが、瞑想（クリシュナムルティのいう瞑想とはややニュアンスの違う）を習慣にしていると、静かで落ち着いた人間性が出てくるわけですが、そんな人たちが刑務所で殺人犯を目の前にするようなことがあると、動揺してしまうわけです。

話のついでに、改めてクリシュナムルティのいう瞑想とは何なのか、述べさせていただきます。瞑想と言いますと、例のお決まりのポーズで目を閉じるという形式をすぐに思い浮かべるとするのが大半でしょう。ダンテスダイジは、こまかい型も教えていたようです。現代では、健康法的なプチ瞑想といったものも一部で流行っているようです。

クリシュナムルティのいう瞑想とは、頭の中を勝手に駆けめぐる思考や感情の動きを、ただ観察しているというものです。これなら、電車の中でも、コーヒーを飲みながらでもできるというわけです。言葉でいうのは簡単ですが、実際にやってみると、いつのまにか、ぼかんと考えごとをしているものです。

この瞑想はクリシュナムルティに限らず、微妙にニュアンスや言葉は違えども、なじみの手法であり、いまでも教えている場は縷々あるでしょう。たとえば、古来のヴァネッサ瞑想というものが有名ですし、グルジェフは自己想起といい、山口修源は自観法と表現しています。

もし、生命が手法——自己想起——によって変成された感情ではなく、否定的感情によって駆り立てられるならば、七人の悪魔が入り込んでくるかもしれない。手法の素晴らしいところは、それをつかうことによって変化が直接もたらされるということである。触媒によって科学的な変化が生じるように、自己感覚や自己想起、自己観察によって生命に変化がもたらされるのだ。

別の言い方をすれば、三人の子供や兄弟が一つの部屋の中でけんかをして、たがいに争っているようなものだ。ドアがゆっくりと開き、父親が様子を見ている。しかし、彼は何も言わない。ただ、観察してるだけだ。やがて、けんかは収まり、子供達はそれぞれ自分がしていたことを再開する。（『回想のグルジェフ』より）

自分の心をただ眺めてごらんなさい。たいへんに楽しいものなのです。楽しみや面白いこととしてやってみるなら、君の方の制御しようとする努力もなしに、心が落ち着き始めることに気づくでしょう。（『子供たちとの対話』より）

自分の活動と思考と感情のすべてに気づいていることが、とても重要であるわけです。そしてこれが教育でしょう。なぜなら、十分に自分に気づいているとき、心はとても敏感で、とても機敏になるのです。（『子供たちとの対話』より）

よく、言われるのはクリシュナムルティは、一般的な瞑想の型を否定しており、それが彼の教えを万人が実践できない大きな要因だということです。

多くの年月を瞑想に費やしてきた人が、実は地上で最も鈍感な人間である、ということに気づかされたことがよくあります。（『時間の終焉』より）

クリシュナムルティには簡単にできても、我々にはそうじゃないというのが現実でしょう。ですから、その前座としてマントラのようなものに集中させたり、一点を凝視したりという型の瞑想を通して、集中力を養ってから自己想起に入ることを教えるというのが、かつてのヨガの常道だったようです。また、禅では作業の細かい動きをマニュアル化していたり、グルジェフもそれと同様のワークといわれるものをしていたようです。

ただし、これも、けっして瞑想の易行道ではないようです。私自身も、上達はしていますが、クリシュナムルティからみれば、まだまだでしょう。そのことがわかった上でも、十年、二十年とやり続ける意思があるかどうかでしょう。先述の、新しい生き方を発見することに、時間もエネルギーもすべてを費やそうという人こそマジメな人と呼びたいというクリシュナムルティの言葉どうり、絶対に易行道などなく、それをうたい文句にしているようなものは、例外なくインチキでしょう。やはり、真に真面目な人にしかやり抜けないでしょうし、進歩は木の年輪の変化のごとく遅々たるものでしょう。そんな中、瞑想が楽しくて酒を飲む気もなくなるくらいになれば、しめたものでしょう。

自分の内面の動きを本当に観察し、学ぶためには相当の訓練が必要なのです。「悟り」とは、精神指導者の意見に従って得られるものではありません。それは、自分自身の中に存在するものを理解することによって得られるものなのです。（略）この状

態は、その精神が安らぎと幸福感に包まれているときにこそ可能なのであって、強制的に心をコントロールしたり、「そのうち自分の心が理解できるようになるだろう」という希望を抱いては、いつまでたっても本当に心を理解出来るようにはなれません。希望を抱くということは、失望から逃げることなのです。ですから、希望など抱かずに自分の中にある失望を理解することです。「存在するもの」を理解しているときには、希望も失望もないのです。（『暴力からの解放』より）

よく思われがちな、覚者がいつも冷静で怒ったり恐怖を感じたり、緊張しないというのは違うようです。クリシュナムルティも、講演の前などには、時に緊張で震えていたと言います。高層マンションで育った子供は、高い所に恐怖を感じなくなるそうですが、それゆえの事故も報道されています。毒蛇が目の前にいたら飛び上がるのが自然と、クリシュナムルティも言っています。

私たちのほとんどにとって恥ずかしさは自意識を意味します。そんな人物がいるとして、えらい人と会う時には、自分を意識してしまいます。「なんて彼は偉大なのだろう。こんなにも有名だ。しかし、私は何でもない」と考えます。それで恥ずかしくなりますが、それは自分を意識していることなのです。しかし、異なる恥ずかしさがあって、それは優しいということなのです。（『子供たちとの対話』より）

日本の警察では、新人に防具をつけてお互いに殴りあうような訓練をさせるそうです。凶悪犯と対峙した時のシュミレーションなのでしょう。過激な表現になりますが、人を殴るという行為は、瞑想だけやってきたような人には逆に難しいものなのでしょう。全くの自論で確証はないのですが、状況次第でそういうこともできないと、優しい感情も微妙に屈折して出にくくなるように思います。感情振幅の余裕がないというんでしょうか。会社などでも、ミスを隠そうとしたり、責任を押しつけられると急に変わったりして弱い人になすりつけるという人も、そういうタイプでしょう。

中学時代、校内暴力があり、ある先生が不良生徒に静かにするよう注意したところ、「文句あるのか」と胸ぐらをつかまれ、「ない」と先生は即答しました。この時から、他の生徒までが授業中騒ぎ出すようになりました。また、先生も、どこか誇りを失ったように見えました。同情すべき点はありますが、殴られてでもひるまないという気概をみせてほしかったです。そのことが即生徒への教育にもなったでしょう。

これに関連して、新約聖書に書かれている、左の頬を殴られたら右頬も差し出せという

有名な文言について、私なりの解釈を書いてみたいと思います。

この教えをキリスト教信者が額面どおりに受け取れば、そういう場合、黙っていいなりにならなければならないわけです（笑）この文言も一般の日本人を、キリストの教えに近づきにくくしている一因だと思うわけです。

まず、恨みを持つ、恨みに基づいた行為というのは例外なく、よくないということがあると思います。しかし恨みを持たないということは、なかなかできないことです。そう言い聞かせて我慢してもなにかの拍子に爆発したり、弱い立場の人にやつあたりしたりするものです。これは、ある程度、瞑想がすすんでこないとわからないことでしょう。また、この文言はさきの抵抗する勇気のない人たちの自己正当化にも使われます。自分の態度は、間違っていないんだとなるわけですが、彼らの多くが抑圧的で、強い感情を持たなくなり、本音を忘れてしまいます。かといって、恨みで動けば、自分にも跳ね返ってきます。じゃあ、いったい、どうすればいいんだと。（笑）瞑想が進まないうちは、頬を差し出すのも間違い、相手を殴り返すのも間違いということになるんじゃないでしょうか。

これはまさに日常生活で誰もが通らなければならない禅の公案のようなものでしょう。しかし、難問公案だけに切り抜けて答えを体得するという人も少ないのかもしれませんが。これを難問と思っていない人も多いでしょうが。そういう難関をクリアして、はじめて、右の頬を差し出すのも、逆に、相手の頬を殴りつけるのも自分が主体となり、自由自在になってくるということではないでしょうか。あるいは、異教徒や権力者から攻撃された場合、ガンジーのような無抵抗をするのも一つの手法でしょう。（もっとも、彼はすでに名のしれた存在でしたから、彼に危害を加えれば世界中から批難が殺到するという事も計算にあったかも知れませんが）長い目でみれば復讐は復讐しか呼び起こさないからです。

話を戻しますと、日々がお茶らかしの連続というのは、異常でしょう。一人でなにもしないでいると襲ってくる空虚感からやみくもに逃れようとするとか、いまのテレビは、まさにそうでしょうし、ワイドショーなどもちょっとまともな感覚があれば、すぐ飽きが出る、見続ければ、さらに内面がおかしくなってくるというような類ばかりでしょう。

私は中学時代、野球部に入ったのですが、少年野球で私よりも下手だった同級生に追い抜かれレギュラーを取られてしまいました。当然、挫折感のようなものはあるのですが、そんな気分をごまかすため、自虐ネタでふざけていると、楽になったものです。しかし、いつしか、こんなことを続けていたら、自分がダメになると改心して、家に帰ってからも真面目に素振りに明け暮れるようになったことを思い出します。

極端に言えば、そういう空気を読む感覚だけに長けていくような社会のムードというの

でしょうか。こういう本音をいえば、みんなが本能的に喜ぶだろうというのは、私などでもなんとなくわかるものです。そういうところで、クリシュナムルティや司馬遼太郎の名前を出すだけで、ムードが壊れてしまうわけです。（笑）それで、また空気をもとに戻そうと茶化す人たちが出てくる。現代はテレビでそういうことをやっている人たちが、憧れであって、人生の手本になるわけですから。

精神世界に興味を持つ人たちも、実際話してみると、観念的な解脱や超能力的なものに憧れたり、ちょっと拙い感じのアニメで描かれているようなキャラクターを心の教祖にしていたり、占いのようなものに依存したり、子供が空想する天国を描いているような甘くて観念的な本が多くなってきているように思います。釈迦のゆるキャラ人形などの類もそうでしょう。やはり、これも、社会の子供っぽいムード、子供迎合文化に合わせたものだと思うのです。釈迦は偶像崇拜など、もともと、すすめていないでしょうが、そういうものを見て、時に敬虔な思いに浸ることは、ある成長段階で、必ずしも悪いことではないと私は思うのです。しかし、もはや過去の仏像も、高尚すぎて怖いというか、近づきにくくなったのでしょうか。（笑）もっとも、クリシュナムルティは、石に布を巻きつけて、それに毎日祈っていても、敬虔な気持ちは出てくるものだと否定していますが。

自己実現コーナーに並ぶ本も、どれだけお金を儲けられる人間になるか、そのための自己実現というニュアンスが強くなってきているように思うのです。必ずお金持ちになれると信じるなら、億万長者になれる、成功者になれるというようなプラス思考の類というんでしょうか。もし、お金が入らないなら、人間的成長などしたくないというように。（笑）

達成願望は人々の中に根強くあり、彼らはそれを何としても叶えようとします。あらゆる仕方での、そしてあらゆる方向への、この達成が人々を元気づけています。もしある方向での達成にしくじれば、かれらは、他の方法で試みるのです。が、達成などというものがあるのでしょうか？ 達成は一定の満足をもたらすかもしれませんが、それはすぐにしほみ、そして再び私たちは探しはじめるのです。（『しなやかに生きるために』より）

お金は人々をだめにします。富者特有の傲慢さがあります。どの国でも、ごくわずかの例外をのぞいて、富者にはあらゆるものを——神々すらも——ひねりつぶすことができるというあの特有の尊大な雰囲気があり、そしてかれらは神々をも買うことができるのです。豊かさは金銭的な蓄えによってだけでなく、何かができるという能力

によっても感じられます。能力は人に奇妙な自由感を与えます。能力の持ち主はまた、自分は他の人々より勝っている、彼らとは違うと感じます。このすべてが彼に一種の優越感を与えます。彼は、どっかりと腰掛けて、他の人々が身もだえしているのを見守るのです。彼は、自分自身の無知、自分自身の精神の暗さに気づかないのです。お金と能力はこの暗さからの格好の逃げ口を提供します。（『しなやかに生きるために』より）

自己実現が金儲けの手段に堕してしまっていると言いますか。少なくとも、自己実現欲を提唱したマズローの原本を正確に読めば、それらの類がいかになされた方向にいつているか一目瞭然です。

あるいは、精神的なステージがどうだとか、苦しみから逃れたい一心の解脱への子供っぽいあこがれ、それもインスタントに結果を求めたり、そういうことが安易に可能と思わせる教えは、過去にもありましたが、いまは、さらに増えたようにおもいます。また、ビジネス書も、かつては、古典、禅とビジネスを結びつけたようなものもたくさんありましたし、合理主義、経済一色ではなく、ビジネスを通じた人間形成に着眼点が置かれたような経営者が書いた本がたくさんありました。大企業経営者で座禅を組んだり、瞑想をする人も、少なくなかったように思います。

仏教の有名な言葉に、泥沼に咲く蓮というのがあります。泥沼という意味では、確かに、いまの日本はいい環境ではないかという見方もできるでしょう。おもうに、過去の経営者で求道的な人物の人相を思い浮かべると、山にこもった仙人やインドの聖者や覚者といわれた人達より美しく洗練されているようにも私には思えるのです。これは、やはり泥沼的な環境が、さらに内面を磨くという風にも思えるのです。もちろん、金儲けのことばかり考えている経営者の人相は、また、それなりの雰囲気を漂わせるものでしょう。

また、司馬遼太郎のいうように、瞑想や坐禅の真似ごとをしているうちに逆におかしくなってしまうような人も少なくないわけです。そういう悪しき例は、物質至上、経済至上主義で生きている人たちの正当化のターゲットに利用されてしまうわけですが、これはやむをえないと思うのです。クリシュナムルティも指摘していますが、快樂と苦痛はコインの表裏でセットでくっついているということです。それは、なにごとともそうでしょう。原発というのは、あれだけのエネルギーを効率よく作り出せるわけですが、その裏の負の面は今回の大地震で誰もが知りました。万人に万能の教育ツールなどあるはずないわけです。

たとえば、キリストが説いた新約聖書の教えが、枝分かれして形を変えた無数のものも

含めて、どれだけ世の中の奉仕や人間の霊的成長に貢献し、逆に戦争や殺人を生んだかということ、つきつめて研究しても、その採算は人間の目には永久にわからないと思うのです。あるいは、プラスマイナスゼロどころか、マイナスになってしまうかもしれません。しかし、スマイルはバラになれないし、我々人間は、人それぞれ、これからも、いろいろ過ちを犯すでしょうが、その都度、信じることをやっていくしかないのではないのでしょうか。

経済至上社会というのは、一方でそういう危険性をはらんでいるのだと思うのです。まあ、どれもそうでしょうが職業には、政治家、医者、カウンセラーといった、特にお金儲けに走ってはいけない、必要以上に警戒しないといけないという類があると思うのですが。精神科医なども、ただ薬をあげてる方が、楽だし、儲かるわけです。しかし、口ではきれいごとを言っても、まわりがそれを許してくれない、がんじがらめの状況をつくっていることも事実でしょう。というのは、現実的にも、いろいろ税や公共などに費用がかかる世の中になり、イリイチも指摘しているように、過去の貧困というのは、これ以上落ちようのない最低ラインがあったわけですが、現代は、テレビを見ない人でも、受信料を払わなければならなかったり、過去に作り上げた公共物の老朽化やらで、税金や義務的な出費も増え続け、貧困にとどまらない犯罪者扱いされる可能性もあるわけです。

また、それ以外にも、世間体を気にせざるをえない。創造性や活力のない世の中ほどそうなります。この年代で、このくらいの年収が相場というような目で、周りの人達と比較して、自分のランクをみざるを得ない。たとえば、カウンセラーにしても、高額なカウンセリング料でお金持ちが多数利用するものであったり、年収の多い人の方が尊敬され信用されたり、さらに相談者が増えるわけです。ブランド品を求める心理と同じでしょう。また、都知事選にカウンセラーが出ていました。彼は真に政治をこころざそうとしたのでしょうが、こういう場を宣伝に利用しようというような人もでてくるかもしれません。それでも、やはり、ある程度お金がないと、ああいう場にすらでれないわけです。こういう世の中では、やはり、不必要に金儲けに走らざるをえないわけです。

さらに、長時間、給料をもらう場で働いていないと、なまけもの扱いされるという世の中の誤解もあるでしょう。極端に言えば、その人がどれだけ働き者かの判断が、給料の額と、会社に自分を売った時間によるわけです。

かつて、イランでボランティア活動をしていた人たちが、現地の賊に拉致された後、救出されましたが、救出にも税金がかかる等と非難轟々でした。これは世界的に見ても特異だそうです。やはり、自分の時間を会社に売って、言いつけを忠実に守り、ミスをしないことこそ真面目に仕事をやるということだという思い込みが、こういうヒステリックな現象を生むのではないのでしょうか。五時に帰るアルバイトは、八時間も働いて時給も安い上

に、働かない、怠け者と責められるわけです。しかし、よく観察すると、物理的な仕事量は社員とそんなに変わらなかったりするんじゃないでしょうか。（笑）仕事をしたという評価は、神が見るようにあらゆる角度からみるなら、非常に難しいわけです。一般的な人間の評価を使うにしても、どの仕事でも、年収という枠をはずして、その人がやっている仕事をじかに冷静に観察すれば、いかに、給料という数字の尺度がいい加減なものかわかると思います。一度、先入観のないアマゾンの原住民などに、仕事の内容だけを説明して、誰が一番給料をもらっているかのクイズでもさせたら、面白いのではないかと思っと思っています。

私は、もっとあらゆる分野の仕事をしている人が、一週間どうすごすか、その仕事の内容やそういうものにどう感じたかの本音を細かくブログで綴るなどして、学生や就職浪人が参考にできればいいと思うのです。たとえば、現代、日銀で働いている人が何人いるかわかりませんが、その人たちが普段、なにをやっているかは、さらに謎でしょう。そういうものの意見がネットに飛びかえば、また仕事や、働くという意味の価値観も変わってくると思うのです。

司馬遼太郎が指摘していましたが、自分は余暇にこういうことをするために、余暇に社会に貢献するためにアルバイトをするんだというのがあっても、いいと思うのです。将来、それで食えるようにというのとも違う。それでも、こういう生活をしていくんだと。もちろん、食えるようになってもいいですが。（笑）いろいろ、苦しいかもしれませんが釈迦が発案したライフスタイルよりはマシかと思うのです。もっとも、釈迦からすれば、こういう発想自体、見当違いでしょうが。

相当な知力の人で、生涯、アルバイトからアルバイトをしつづけて送るという、いわば軌道をもたないスタイルの人がふえるだろう。そういう人が、かえってファッションナブルになって、既成体制を刺激したりもする。

以下は、多分にバラ色の希望だが、そういう人たちが、時間を大量に持つという意味での精神の貴族になってくれば、ひょっとすると、芸術への多様な感受性群が生まれる。受け手がいいから（願望である）わが国の演劇や美術、あるいは文学といった創造的な分野が新展開を見せるかもしれない。（司馬遼太郎『風塵抄』より）

私が知る限りでは、過去も含めて日本で、フリーターのような生活をここまで肯定している識者は、司馬遼太郎くらいですね。マア、そういう生活でも仕方ないよね、そういう生活でも明るく生きれたら素敵だね、程度の諦観めいたものはありますが。それは、司馬

氏がクリシュナムルティ同様、社会に適応する、社会の中でブランド的なポジションを手にするのが幸福への近道という思考停止を越えて、活きたスケールの大きな目で人間の人生というものをとらえていたからでしょう。

他の人々に対して権力を持っているどの団体、協会、宗教のかしらも悪人です。なぜなら、彼は、自分自身がどこに向かっているかも知らないで、他の人たちを管理し、形作り、導いているからです。これは大きな組織だけではなくて、世界中の小さな団体についても真実です。人間は、明晰になり、混乱しなくなった途端に、指導者であることをやめてしまいます。（略）もし君がありのままを変化させようとせずに、理解しはじめるなら、そのときありのままの君は変容を遂げるでしょう。無名で完全に知られずに、有名になったり、野心を持ったり、残酷になることもなく、この世に生きられると、私は思うのです。自分を重要視しないとき、人はとても幸せに生きられます。（『子供たちとの対話』より）

一つは、日本が、現在大思想による生々しい拘束なしによき社会を作っていることを、地球や世界の課題の中で役立てられないかということである。これにはむろん、そのためのあたらしい思想がいる。（略）

三つ目こそ大切である。若者が活力を持つためには、社会から馴致されるなどということである。古いことばでは、「不羈」という。手綱で制御されないという意味である。ただし、この場合の難しさは、自分で自分の倫理を手製で作らなければならないことである。しかも堅牢に、整然とである。出なければ、社会に負かされ、葬られる。人間は大思想や社会によって馴致されて人間になるといいながら、実は、古来、真に社会に活力を与え、前進させてきたのは、このような馴致されざる人たちだった。（『風塵抄2』より）

これなどは、クリシュナムルティが言っていることと同じでしょう。こういうライフスタイルの理解者は少なく、私のようにフリーターの範疇にすら入らない中年アルバイトなどは肩身のせまい思いをしなければならないわけですが、そのような中で、当時のベストセラー作家でもあり、ずば抜けたリアリストである司馬氏が、こういう見方をしているということで、三十代そこそこだった私にはずいぶん励みにもなりました。しかし、実は釈迦もキリストも、トルストイも、同じようなことを説いているわけです。

悩みの霧のたちこめたようなぼんやりした視界の森の中を右往左往しながら遅々出口を

探し歩くような人生の中で、ある人から『自我の終焉』という本を紹介されたのですが、当時、二十代前半だった私には、まったく歯がたちませんでした。しかし、三十代になって、改めて読み直すと、私がそれまで少しずつ暖めてきた人生の疑問が、一気に溶けていくような気がして、それから新たに購入したり、図書館で探したりして日本で翻訳されているクリシュナムルティの本は、ほとんど読んでしまいました。もっとも、真の理解と、読書だけで頭につめこんだものとは、またニュアンスは違うでしょうが。

これまで理解できなかった仏教と新約聖書の言ってることによくわからない部分まで氷解していったというのか、細かな個性の違いによる教義の違いはあっても、やはり真理はひとつにつながっているんだなということを思い知らされた気がしました。クリシュナムルティは、解釈の洗練さでは際立っており、言葉足らずの宗教原本の架け橋にもなるものです。ダンテスダイジは、クリシュナムルティの本を読むことは、瞑想と同じ効能を発揮すると言っています。全く同じとは思いませんが、こういう本は類例がないでしょう。仏教では、しばしば言葉による真理の解釈の世界を軽蔑したようなことを言ったりしますが、クリシュナムルティは、言葉で表現する世界と両方必要だと言っています。

自由の問題を探求するには、学者の観察だけではダメであって、あとを残さずに飛んで行くあの驚の態度がなければならない。言葉で説明するということと、言葉を伴わない知覚というものとの両方がなければならない。（『自由への道』より）

ですから個人的に私は、ギータとかウパニシャッド、仏陀の言葉などの本を一冊もまともに読んだことがないのです。それは実に退屈でした。私にとっては何も意味しませんでした。私にとって意味があったのは、観察することでした。インドの非常に貧しい人々、金持ち、独裁者、ムッソリーニやヒットラー、フルシチョフやブレジネフといった政治家らを観察してきたのです。すると実に多くのことが学べます。なぜなら、真の教科書はあなただからです。（『生の全変容』より）

しかし、すべての宗教、例えば様々な仏教流派を調べてみると、あなたがおっしゃっているのと、ちょうど同じようなことをある程度まで言おうとしています。（デヴィッド・ボームとの対話集『時間の終焉』より）

いま、大書店の書棚には、クリシュナムルティ専用の棚まであり、彼の本が、私の若い頃よりも、かなり増えています。（先ほどからの話と矛盾してるようですが）そういう意

味では、求めてる人には、いい世の中になったようにも思いますが、やはり、それらを読んだという人たちの話を聞いても、どうも理解が核心から逸れているようなことが少なくないように思ってしまうのです。

やはり、なんだかんだいってこの出来上がった社会にうまく適応していくことが必須で、日々、そういうことをまわりからいわれる。その呪縛から逃れようとするのは、日本全体の経済力を押し下げる確信犯なんだといわれ、かといって、そういうことがどうしてもできなくてどっちつかずでいるうち、傷を舐め合うようなサークル化しているようにも思うのです。もちろん、それが全面的に悪いは思いませんが。

仏教でも、そうだと思うのですが、まず、内面ありきということだと思うのです。内面世界を守るために、クリシュナムルティでいえば、あの大切なものを開花させるためにどう生きるかといってもいいと思うのです。そのために、釈迦が編み出したように法を説いて一軒一軒まわり布施をもらうという生活態度が生まれたのでしょうか。しかし、クリシュナムルティは、インドですら、もはや、そういうことはできなくなったと言っています。また、やる必要ないとも。こういう目から鱗が落ちるようなことを言う人が年々少なくなっているように思うのです。

クリシュナムルティからすれば、内面が空しいから、名声や、成功やらを求めるということになるわけですが、普通は、そういうものを得た時のアドレナリンの色濃い笑いがこみ上げてくるような感覚が内面の最高の満足だと思い込んで、誰もがそれを求めて生きていると思ってしまうようです。そして、笑っているほど、それも爆笑してる時が多いほど、幸せなんだとなるようです。また、他人の笑顔に頼ってエネルギーを得る人もいます。しかし、クリシュナムルティは、快樂と喜びの違いということを繰り返し述べています。それは、微笑が代名詞でしょう。ただ、この違いは瞑想をやっていないとわからないでしょう。（クリシュナムルティはジョークを飛ばし爆笑もよくしていたようです）

住職にしても、たしかに、厳しい修行をしている人もいますが、やはり、腹の底にまで落ち込んでくるような言葉を吐く人、観念でない道理を教えてくれるような人は、少なくなっているように思うのです。あるいは、寺の跡取りなどで免許を取るための修行に墮しているという人も少なくないでしょう。

私の時代は特にそうでしたが、若い頃にフリーターなどやっても、まわりからの悪口や白い目がすごいわけです。（笑）どうしても、そういう空気に押されて進路を選んでしまう。それをしのぐ論理がないわけです。それじゃ、結婚できない、病気したらどうする、年取ったら大変だ、等々。

ほんとは、そういう人たちこそ、社会の中で培われてきた先入観から脱することができ

ないのではないのでしょうか。言葉は悪いですが、洗脳というのは、カルト団体などに入信した人の悪口によくつかわれます。しかし、そういうものは、国や家庭、会社、どこにもあると思うのです。ただ、普通は、少数派が「洗脳された」という表現でわるくいわれるだけの違いで、経済至上民主主義では、どうしても多数派が正しいということになるわけです。ただし、映画でも、カンヌとかベネチアなどで最高賞を取るような映画というのは少数派向けに描かれてると思うのですが、前に見た映画で、陪審員がいろいろ話し合っていくのですが、一人の見識ある人の意見が最終的に多数派になっていく様を描いていました。多数派というのは、刻々と変わるものでもあります。

クリシュナムルティの教えを頭で理解することすら難しい。まして、クリシュナムルティがいうような生き方を実践し貫いていこうというのは、それ以上に難しいことだと思うのです。

ただ、格差が広がり、非正規雇用が増え、物価も下がったというのは、悪いようにばかり言われますが、アルバイトでもやむをえない、なにか事情があるのだろうという寛容な目で見られたり、クリシュナムルティや司馬遼太郎のいう生き方を行う風向きとしては、少しは楽になってきたとも思うのです。仕事をえらばなければ、飢えないていどの仕事はたくさんあります。キリスト教文明国のような既成の宗教権力の教義の縛りも強くありません。むしろ、世界的に見ても、現代の日本が一番やりやすいように、私には思われます。

実際、クリシュナムルティも、勘違いしちゃいけないよ。世間は狼の巣窟なんだというようにことをいっていますし、彼がいうような生き方を貫こうとすれば、相当、反発にも合うでしょう。ただ、それでもなかなか飢え死にしないような日本の環境というのはありがたいものです。それを生かすも殺すも、自分次第だと思うのです。

最後に、新約聖書に忠実な教えを原点に戻って実践していこうと幕屋を立ち上げた手島郁郎の言葉を借りてしめくらさせていただきます。

私は思う。こうやって日本に幕屋運動と称する霊的なグループが現れた。やがてこれらの母親たちによって育てられる子供たちの中から、次の時代を担う驚くべき人物が出るだろうと信じています。願わくは、母親たちに「霊的に育てる」ということがなんであるかを知って欲しい。それは戒律的に育てることであったり、儀式として宗教を教えることではない、ということです。（略）

神のみ言葉は力強い力を含んだ言葉ですから、もうその人を動かしたら必ず成就します。奇跡的な方法で成就します。従い出す人間がいたら、神様は驚くべきことを、

その人を通して始めなさるということです。これは、人間が一生懸命進行することとは違います。神に打ち任せて生きている人の信仰と、人間の努力でやっている人の信仰とは違う。頑張っているのと、神の大きな力に振り回されて、我を忘れて生きている人の信仰とは、信仰と言ってもだいぶ違います。（略）

全能者である神様は、誰に彼に、時がきたら何かしようとされるが、その時に常識や己の自我が働いて拒むと、天がその人を通して地上界に大きな不思議をなそうしてもできません。分けても女の人というのは、家事にかまけたり、日常生活にせわしく生きたり、なかなか霊的生活なんかできないものです。（略）

私たちがこの世で生きておりました、最も力強く、最も幸いなことがあるならば、それは神の道具となることです。神が御旨を成就するために、ある人をお使いになるということです。そうすると、その人間にはほんとうに恵まれた生涯が始まります。